

白山麓高地出作りのヌケ小屋 —白峰村大杉谷出作り群の強風避難小屋—

橋 礼 吉

THE NUKEGOYA OF HIGH-LAND DEZUKURI IN THE MT. HAKUSAN AREA —THE STORM-SHELTER IN THE OHSUGIDANI DISTRICT, SHIRAMINE-MURA—

Reikichi TACHIBANA

はじめに - ヌケ小屋の紹介をかねて -

ヌケ小屋とは

石川県白峰村を含めた加賀地方では、逃げることを「ぬける」という。出作り住居は、台風や台風並みの強風に襲われると倒壊の危険にみまわれる。出作りでは、強風時、緊急的に母屋を離れ、別棟の耐風構造の建物に逃げこんで危機を回避した。この際の逃げこむ建物が、ヌケ小屋である。

白山麓には、焼畑と結びついた「山住散居」方式、いわゆる出作り慣行が盛んであった。出作りという漢字表記や言葉は、文字の意味する内容を含め、その生活慣行や実態は理解しにくい面がある。一般的には、雪が消えると集落より山地に出て孤立住居で生活し、降雪期になると集落に帰ってくる慣行と理解される場合が多く、具体例もある。ところで、集落より山地に出てしまっ、無雪期・積雪期を問わず、一年を通して山地で生活する慣行もあり、具体例も多い。調査者は、便宜的に前者を季節出作り、後者を永住出作りと言って区別する場合がある。ヌケ小屋の存在や強風時の避難事例は、白峰村の永住出作りにあった慣行である。

出作り住居は、「出作り小屋」という呼称を使ってきた。出作り小屋という表現や表記は、仮設的施設を連想しがちである。しかし、出作り住居の実態は、平野部の水稻農家住居並みで、決して粗末な建築物ではない。白山麓は、日本列島の豪雪地域の最南端に位置するため、出作り住居は耐雪構造を優先させ、屋根組・柱・梁・桁等は一級品を使うため頑強となる。また、隙間からの粉雪の吹きこみを防がねばならず作りも丁寧となる。したがって出作り住居は、耐雪構造が耐風の機能をあわせもつため、風にも強いのである。出作り小屋という言葉より、漠

然として「材料・普請を手抜きした仮設的住居」とイメージし、「だから強風には倒壊しやすい」と誤解し、その帰結として強風避難小屋は当然であると、判断されては困るのである。冬季、多量積雪にみまわれる出作り住居は、材料選択や、普請の仕事量等に関して吟味した建物である。このような“住”条件下で、出作りで暮らした人々は、母屋近くにヌケ小屋を建て、毎年数回避難するという実態があったのである。

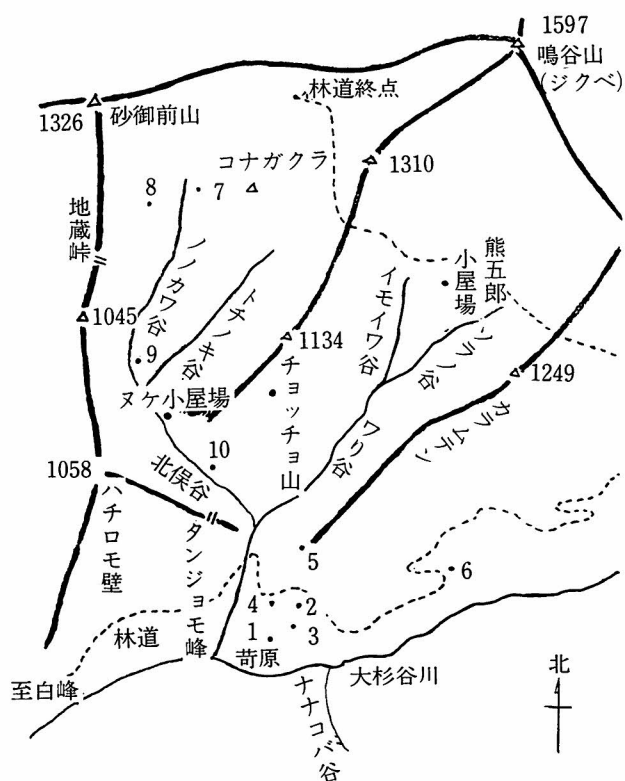


図1 大杉谷苛原と北俣谷周辺の概図
図中の数字は、表1・2で示した出作り地の所在を示す

調査対象地

かつての手取川上流部の呼称、具体的には尾添川合流部より上流部の本川は「牛首川」と言っていた。牛首川は、白峰集落上流右岸より、大杉谷が本川に流れこむ。国土地理院発行の地形図では大杉谷と表記するが、伝承者の記憶する地名すなわち慣行地名では「河内谷」と言い、大杉谷とは言わない。白峰集落より大杉谷右岸に沿った林道を約5km行くと、右岸山地より北俣谷が急傾斜で落ち込んでいく。大杉谷と北俣谷の合流地付近の緩傾斜地を「苛原」と言い、慣行地名では「河内谷・苛原」である。

「河内谷」という慣行地名を国土地理院発行地図では採用していないので照合できないから、以下「大杉谷苛原」とする。ヌケ小屋との最初の出会いは、昭和44年(1969)8月、大杉谷苛原の出作り長坂吉之助家であった。長坂家は、かつては苛原12戸(永住出作り9戸、季節出作り3戸)の組頭を務めた家で、先祖は明治期小規模な鉱山経営をした特徴的な出作りであった。金沢平野部の茅葺き水稻農家は全部が1階建てであるが、長坂家は養蚕に重点をおいた2階建ての茅葺き住居である。2階建てのせいで住居棟高が平野部農家より高く、強風時には相当風当たりが強かったと思われる。現在この建物は、大型出作り住居のモデルとして白山ろく民俗資料館に移築されているので、一般に見聞できる。

昭和40年代前半は、日本経済の高度成長期で山村の機能低下が著しく、白山麓では出作り慣行の消滅晩期であった。豪雪地域に立地する出作り住居は、利用されず無人化すると、多量積雪負荷が原因で、一冬で倒壊して消滅する。このような情勢の中で、長坂家のヌケ小屋に遭遇したこと、さらに長坂家は出作り生活を老夫婦で続けられ、生々しい出作り生活の実態が調査できたことは、好運であった。また、近隣の苛原・永吉清家では生活本拠地の母屋は出

作りを放棄したので倒壊寸前であったが、ヌケ小屋は破損が進みながらも現存していることが判明した。つまり、一冬を越す毎に、出作り慣行の残像としての住居が倒壊消失していく過程の中で、白峰村大杉谷と北俣谷合流地点、すなわち苛原地区にヌケ小屋2棟が現存していたのである。この報告は、苛原地区とあわせて北俣谷地区の出作り群で行われていたヌケ小屋の利用慣行に関して、山地で生活した人々の生活実態の一つとして紹介するものである。

伝承による強風系とその対策

強風に関する民俗的伝承

白峰村の出作り地域におけるオオカゼに関する民俗的伝承は、次のようである。台風や、台風並みの強風を総括して「オオカゼ」と言う。オオカゼは大別して、春のオオカゼと秋のオオカゼがあった。秋のオオカゼとは、いわゆる台風のことである。春のオオカゼとは、3月中旬より5月上旬にかけて吹き、牛首川源流域に限定的に吹く局地的な強風らしい。

春のオオカゼに関して、手取川ダム着工以前、水没した尾口村・五味島・釜谷・深瀬の各集落で聞き取り調査したところ、深瀬では「雪が融ける季節に白山オロシが吹く」という伝承に接した。さらに白山オロシは、下流の釜谷・五味島では殆ど影響がなかったことも分かった。因みに、深瀬集落では「深瀬の家は、白山オロシが吹くのでタテ屋にする」と言う。タテ屋とは、牛首川の谷筋方向に建物棟方向を合わせた住居を指す。対するにヨコ屋とは、棟方向を谷筋方向と直角にした住居を指す。白山オロシは、谷筋方向に沿って吹くため、タテ屋は風当たりが少なくすんだ(橋, 1979)。

オオカゼの風向は、春も秋も南東方向が卓越して



写真1 大杉谷苛原・長坂吉之助家のヌケ小屋



写真2 長坂吉之助家の母屋とセンジャ (手前)
ヌケ小屋は、右前方に約25m 離れてあった。

いたため、白峰村では風向に重点をおき「タツミカゼ」と言っていた。第二次大戦後のトランジスタラジオ普及期まで、各出作りは情報から隔離された状態であった。出作りは、電源地帯にありながら電気の普及がないのでラジオ受信機が皆無であった。また、集落より遠く離れた山地に散居するため新聞配達もなかった。したがって、秋のオオカゼすなわち台風情報は伝達されず、各出作りは観天望気の体験にたよるしか術がなかった。秋、見馴れない雲が走り、空気が澄んで白山が近く見え、気温が急上昇し風が強くなると、タツミカゼの前触れで予知はできた。ところで、春のタツミカゼは、突如として発生するので準備ができず被害は大きかった。現今でも、春のタツミカゼは气象台でも予報するのがむづかしく、スキー場のリフト運転を中止しなければならぬ程の厄介な局地風である。出作り住居の火災消失事例や強風倒壊事例は、聞き取ることは非常に困難である。このような事故は、出作りの細心注意、万全対策が欠如していたから発生したとの意識が強く、「他家の不名誉は口述はしない」という義理堅さと共同体意識のせいである。このような状況下で、採取した強風による倒壊事例は3件あった。実際には、もっと多くの事例があったと推察する。春のタツミカゼに関する伝承事例は2件あった。一つは、明治末期、桑島地内百合谷、標高745mの季節出作り・イッチョモ（市右衛門）家である。他の一つは、大杉谷苛原、標高750mの永住出作り・ヘイチ家である。百合谷・苛原の事例共に母屋の倒壊である。特に前者のイッチョモは、夜中にヌケ小屋に避難して眠りにつき、翌朝目を覚ましたら母屋はなかったという凄まじいものであった。秋のタツミカゼの伝承事例は1件で明治43年（1910）に起った。大杉谷上流部右岸、標高1,070mの季節出作り・イシキチ家の母屋が倒壊し、母親と乳児が下敷きとなった。母親は死亡したが、乳児は奇跡的に抱かれた胸の中で生存、救助されたという惨絶なものであった。

強風対策

出作りは、複雑な山地地形の中にある一軒屋である。山地は、端的には凸地と凹地、急斜地と緩斜地の構成でなっている。強風は、複雑な山地を吹き渡る時、ある場所では集束し、ある場所では拡散する。順風は、さらにカエシカゼ（返風）に、マエカゼ（舞風）に変化し風向が定まらない。そして集束した強風は、出作り住居を瞬時にして倒壊させる。標高の

高い出作り地は、風当たりが強いはかりか、時間的にも長く強風に見舞われる。この傾向は、秋のタツミカゼすなわち台風で著しかったという。

耐風・耐雪を兼ねた住居構造は、茅屋根を直接地面においた天地根元風にすることで、白峰村白峰という「ネブキ小屋」である（白峰村桑島では、「ナバヤ小屋」という）。ネブキに対し普通の型式を「タテアゲ（建上げ）」と言っている。白山ろく民俗資料館敷地内の尾田敏春家は、かつては白峰村谷・五十谷にあった永住出作りで、耐風構造を優先させた変型ネブキ小屋で、国指定の重要有形民俗資料となっている。風当たりが強く、影響時間の長い出作り地では、その程度差に応じて、三つの方策で対処していたようである。影響最大の出作り地では、人間が生活する母屋もヌケ小屋もネブキ型式にした。影響中位の出作り地では、母屋は普通のタテアゲ、ヌケ小屋はネブキにした。影響低位の出作り地では、ヌケ小屋を特別に作らず、土蔵や納屋をヌケ小屋に転用した。ここでとりあげる強風時避難のヌケ小屋と避難慣行、すなわち苛原のヌケ小屋2棟は、影響中位の出作り地の対処法である。補足すれば、長坂吉之助家・永吉清正家のいずれもが、母屋は普通のタテアゲで、ヌケ小屋がネブキなのである。

ヌケ小屋の具体例

大杉谷苛原・長坂吉之助家のヌケ小屋

構造・規模 長坂家は標高約740mにあった。ヌケ小屋は、強風で母屋が倒壊する恐れがあるので建設したのだから、母屋についても触れておく。母屋は、明治6年（1873）の建築で、間口4間・奥行8間、茅葺き住宅としては珍しく2階建てである。建築材の柱・梁・桁等は、頑強な物を使用しており、その実態は白山ろく民俗資料館で実物で検証できる。付属建物としては、ヌケ小屋の外、2間四方のクラ（土蔵）、間口2間半・奥行3間のコゴヤ（納屋）、2間・5尺四寸のセンジャ（大便所）等があった。

ヌケ小屋は、母屋より約25m離れて建っていた。その規模は、石場間口2.6m・奥行4.4m、棟高（オサエザオまでの高さ）2.0mである。構造は、基礎石イシバの上に三組の合掌を組み、合掌を構造的に強化するため、スジカイを掛ける。合掌に「コスズ」という横木（丸太材）を渡し、茅をふきあげてネブキ小屋を作る。床は、土間に茅を敷きつめ、その上に板を仮に敷きつめてあった。昭和44年（1969）の初見時、妻の西側は板で閉ざし、対するに妻の東側

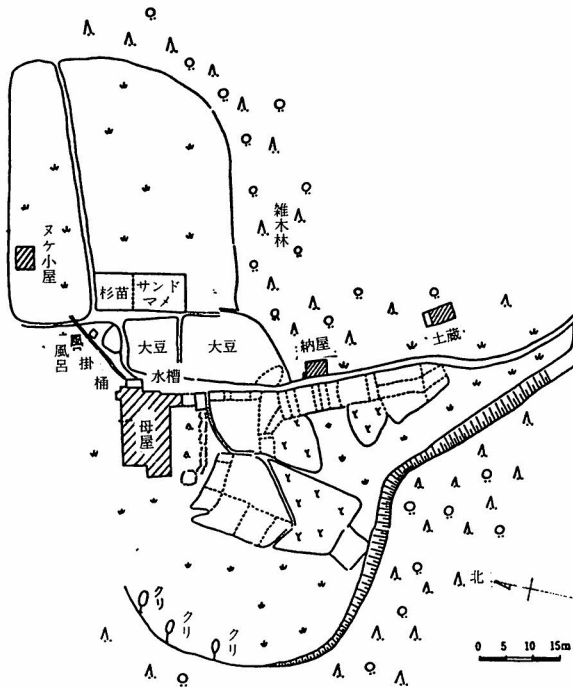


図 2 長坂吉之助家の小屋場の概要
(佐々木高明1973による)

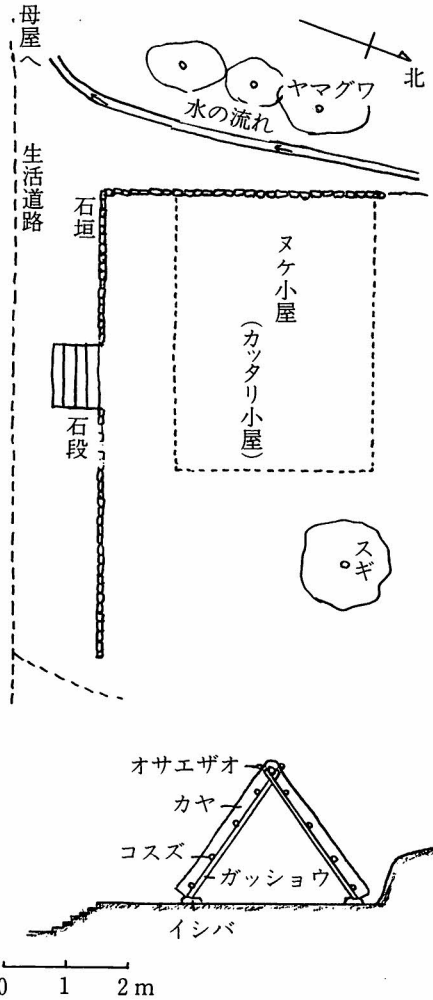


図 3 長坂吉之助家のヌケ小屋

を出入口として利用するため何も施設せず開放してあったが、かつては板戸をしつらえて、強風に対処してあった。冬にはヌケ小屋全体が積雪に被われ、雪の重量で合掌が押しえつけられ、合掌間口が広がってしまう。そこで春先には、合掌組を復旧しなければならなかった。

強風時の避難 長坂家では、春のオオカゼに関しては、性質上二つに分けて対処していた。一つの強風は、3月中旬より4月上旬にかけて吹く「ヤマセ」という白山オロシと、他の一つの強風は、4月中旬以降に吹くフェーンでないかと位置付けしている風である。そして、前者は後者より予想がつきにくかった。昼間に吹く強風は、樹木のなびき方、家屋の揺れ具合が目で確認できることもあって、強風の程度が判断でき心理的に安心できた。ところが夜間の強風は、真っ暗闇で外の状況が把握できず、風を発生源とする音だけが目安となるのみで、心理的不安感が増幅された。感覚的体験からオオカゼは、夕方時

次第に暗くなっていく時間帯が最強になると信じていた。だから、昼間にヌケ小屋に避難したという事例は少なかった。

春、秋のオオカゼが吹く季節になると、平素は収納小屋を兼ねているので、収納物を他に移し、避難空間を用意した。オオカゼの急襲で、収納物移動が間に合わぬ時は、クラへ避難した。クラは2間四方で、3尺毎に柱があり、構造的に強かったからである。長坂家では、母屋の広間に掲げる柱時計の振子を目安として強風度を計り、ヌケ小屋へ逃げこんだ。強風で、母屋がミシミシと音をたてても、振子が止まらなかつたら母屋で生活した。振子が止まると、ムシロ(筵)・ヘットリ(畳表)・布団を持ちこんで、家族全体で雑談し、夜間には仮眠し夜が明けのを待った。子供は、ヌケ小屋に入ると居住環境が変わるので、大人の心配をよそにはっしやいでいた。ヌケ小屋の利用度は、年に2,3回であった。周辺の出作りでヌケ小屋のない家は、長坂家のヌケ

小屋を利用させてもらう慣行であった。「ウチがバリバリ言うから、ヌケ小屋使わしてくれ」と言って、空身で避難してきた。長坂家のヌケ小屋は、近隣の向原四郎松家・藤部折松家が利用した。だから、ヌケ小屋で仮眠すると言っても、3家族がネブキ小屋内に入る時もあり、横になって寝るという体でなく、大人は座ったままの状態では仮眠した。

多目的利用 長坂家では、隣の藤部折松家と共同で、ヌケ小屋にカッターを施設して利用した。カッ

表1 苛原のヌケ小屋利用状況

所有者	利用者
1. 長坂吉之助	3. 藤部折松
	4. 向原四郎松
	5. 小田六松
2. 永吉清正	6. 木戸口謙正

←-----強風時避難
 ←-----カッターの精白利用
 出作りの番号は、図1で所在地を示す

タリとは水唐臼のことである。唐臼とは踏臼のことで、水唐臼とは人間の足の荷重に代わって、水を受ける箱を付け水の重量によって杵を上下させる装置で、白峰村では「カッター」と言った。具体的には、谷川より長さ6尺の樋3本で水を引き、「ミ」という水箱をスギのアカミを材にして作り、石臼をつく仕組で、出入口の反対妻側にこしらえた。スギのアカミ材は、クリ材より耐水性が強いので使ったという。

カッターは、秋から冬にかけて、アワと玄米の精白に使った。アワの精白は、人力による杵・木臼使用と、水力によるカッター使用の二つがあった。二つの技術共に、ヒエと比べ長時間を費やして、丸型の穀実が細長く変型する位につかねばならない。人力依存のヒエ・アワの精白は、昼間は山仕事に精をださねばならず、夜間に実施する慣行で、一晩大人3人で、精白は3～4.5斗位しかできず、そして激しい労働は翌日の仕事にも影響した。アワの精白は、長時間を要する上に量的に多くは精白できず、しかも疲れが残る作業なので、水の便利がよいとカッターに代行作業を依存するようになった。長坂家のカッターは、石臼の容量のせいで、1度の作業で1斗を単位として精白した。水量の豊富な日には、1日4回の精白ができた。石臼に新旧のアワを入替

えする時には、老人・子供がその役を分担すればよく、つくのは専ら水力であるから労働力の省力化には便利で良かった。「アワ五合実」と言い、精白歩どまりは半分で後はヌカになった。アワの精白実丸型実で、穀粒を石臼でひき割ってから精白するヒエと異なり、米粒のように一粒一粒のままで精白を終える。歩どまりは、作りが良い年ほど良く、稀に「七合実」になる豊作年もあったという。

山中に孤立する出作りは、現金収入が少なく支出を可能な限り少なくする必要に迫られた。苛原と周辺の出作り地には稲作水田が皆無で、各出作りは必要量の米を購入したが、その際も出費を少なくする努力をした。白峰集落の商店より購入すれば割高になったので、谷峠を越えて福井県の稲作農家より直接玄米を買い、自力運搬し、自前で精白して割安にし出費を抑えた。この場合は、米価が安い上に米糠も手に入り一石二鳥であった。米の精白は、ヒエ・アワと比較すれば非常に簡単で、雑穀精白時の木臼を使用すればよく、省力化を計る時はカッターが最上策であった。長坂家は白峰集落より、藤部家は福井県北谷地方(勝山市)より玄米を購入し、ぬけ小屋のカッターで精白した。カッターによる米精白には、長坂・藤部両家ばかりでなく、周辺の出作りも利用していた。遠方から来た利用出作りは、約1.5 km離れた孫三郎山(標高820m)の木戸口謙正家、約1 km離れたムツバ(標高860m)の小田六松家等である。遠くの出作りから来て、夜通しカッターを使用すると、精白時間が長すぎて歩どまりが悪くなるので、夜半の水止め作業を長坂・藤部家に依頼し帰宅した。カッターの精白・修理・管理は長坂・藤部両家でやっていたが、他家が利用しても別に料金やお礼をとることはなかった。

また、ヌケ小屋はカッターを施設してアワ・米を精白した外、木炭を俵詰めにし、ヌケ小屋を納屋代わりにして出荷時まで一時的に収納した。

大杉谷苛原・永吉清正家のヌケ小屋

構造・規模 永吉家は標高760mにあった。母屋は、昭和38年(1963)の建築で、間口3間・奥行6間、茅葺き1階建てであった。母屋と常畑は同じ平坦地にあり、ヌケ小屋は常畑より小さい谷へ移行する緩斜面を削って平坦地を造成し、建物を作った。ヌケ小屋の谷側方向では西側にスギを植林しカザガキとしていた。カザガキとは防風林のことである。昭和45年(1970)の調査時には出作り住居は放棄され、カザガキの役をする立派な成木は伐採



写真3 大杉谷苛原・永吉清正家の母屋とヌケ小屋 (左下・杉木立の中)



写真4 永吉清正家のヌケ小屋

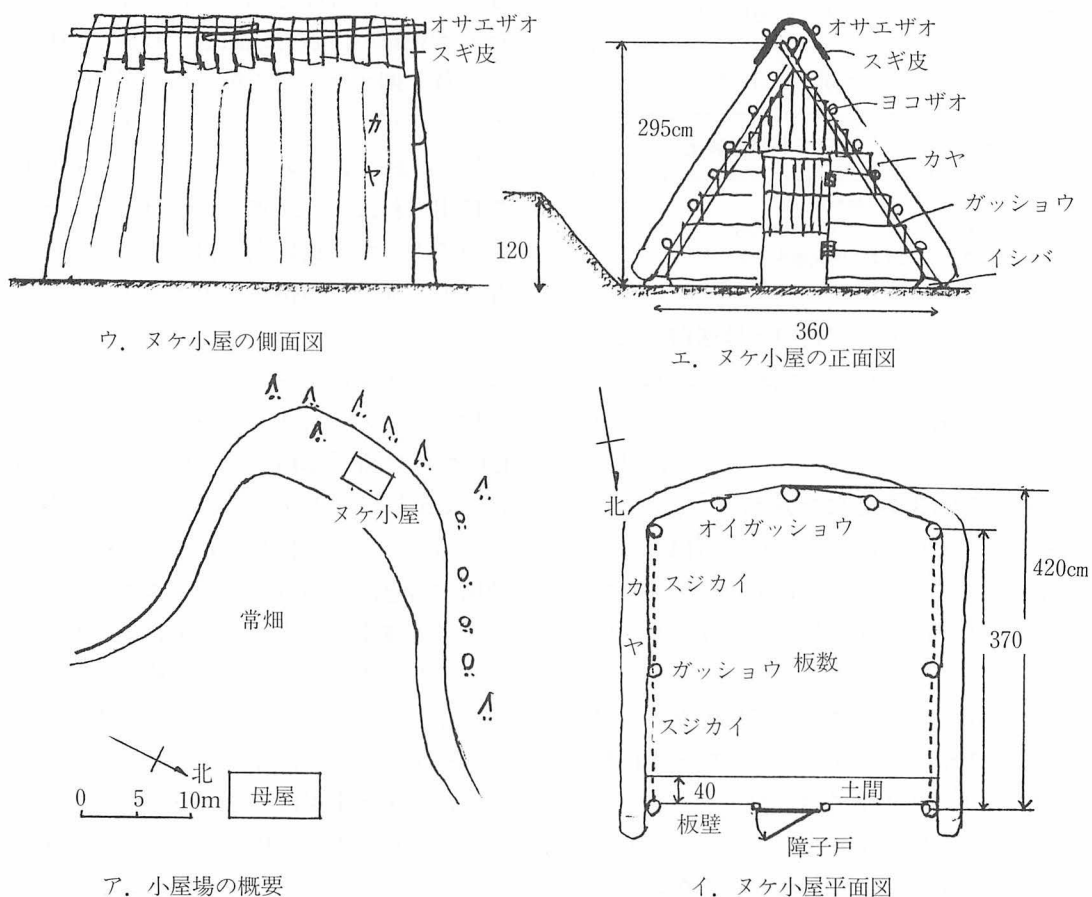


図4 永吉清正家のヌケ小屋

した後であった。ヌケ小屋は、常畑を介して母屋より24.5m離れて建っていた。ヌケ小屋の規模は、石場間口3.6m・奥行4.2m、棟高3.0mである。構造は、石場の上に3組の合掌を組み、構造補強のためスジカイとハリを掛ける。奥部には3本の追合掌を掛け室内空間を広くしている。合掌にヨコザオ6本を渡し、茅で屋根・壁を兼ねて葺き、いわゆるネブキ型式にした。棟部分は、スギ皮を二つ折にして茅を被い、雨雪の浸透を防ぐ機能を補強した。妻の

北側には、幅3尺高さ5尺8寸の既成障子戸をあてがい、さらにありあわせの板を使用して全体を塞いでいた。床は、戸の内側40cm幅で履物脱ぎの土間を設け、その奥は板敷きにしてあった。永吉家の場合の板敷きは、大工仕事で固定してあった。補足すれば、長坂家の場合は板敷きであるが、固定したものでなく板を並べた程度で、板がまくれるのである。**強風時の避難** 春・秋のいずれのオオカゼの方向も、大局的に南風が卓越するわけであるが、永吉家

の小屋場は、強風が山地地形で複雑に変化する「カエシカゼ」と言う北風が吹き荒れた。永吉家の小屋場は、長坂家より約20m程の標高差で高かった。苛原という地名は、急峻な山地地形の中で、この地が平坦地・緩傾斜地が面積的に広くまとまっていたのが由来と考えられる。永吉家は、苛原の中で最も高い場所にあつて、母屋の背後より緩傾斜地が急傾斜の山地となる遷移点というべき位置にあつた。このような地形環境のせいで、風当たりは長坂家より強かつたという。強風が吹くのであれば、家屋構造をそれなりの強さにすれば良いわけであるが、永吉家の出作りは頑強でなかつた。具体的には、長坂家はウマ（梁）とウシ（牛梁）に頑強な材を使って耐雪・耐風構造にしてあつたが、永吉家にはウマ・ウシを使用してなく構造的には弱かつた。長坂家では時計の振子が止まるとヌケ小屋に避難したが、永吉家は、風当たりが強い上に家屋構造が強くなかつたので、オオカゼが吹くとその都度ヌケ小屋に避難した。1年の避難回数は5,6回で、長坂家と比べると多かつた。永吉家は、長坂家と同じく殆ど昼間避難することはなく、夜間の避難である。オオカゼのせいで、家の桷組も屋根の合掌も一緒になってミシミシ・バリバリと音を出して動いた。夜間は、気持ち悪くて寝つかれず安眠できないのでヌケ小屋に入った。昭和45年時（1970）、小屋の前部には痛みが発生してはいたが、利用時の生々しい痕跡が残されていた。小屋内には、照明用石油カンテラ1、イソライト製焔炉1、ビニール袋に入れた木炭1包、木製棚1が置いたままにしてあつた。棚の中にはマッチ大箱・食器・雑誌等があり、さらに室内には捨笠2点、衣類数点が吊り下がっていた。この状態から、ヌケ小屋内には最低必需品を常時準備し、強風襲来に対し、いつでも避難できるようにしてあつたと推察した。

永吉家の最大家族数は14人。家族10人の時は大人も子供も全員が横になって寝た。14人の際は小屋は狭く、子供だけが横になって就寝したが、大人は座つて、茶をシチリン（焔炉）で沸かして雑談し、時の過ぎるのを待った。永吉家のヌケ小屋は、長坂家と同様に隣の出作り・木戸口謙正家も利用した。共同利用の時は、相互に情報交換ができ楽しい雰囲気があつたという。

多目的利用 永吉家では養蚕を経営する期間と、雑穀穂の脱穀・精白をする期間、ヌケ小屋を母屋代わりとして生活した。出作り地の養蚕は、春蚕・夏蚕

の年2回で、桑は焼畑跡地に植栽したヤマグワである。当時の蚕は、ヤマグワの濡れたものは食わないので、雨天日には濡桑を乾かし、さらに雨天が予想されると桑を摘み貯えなければならなかつた。ヤマグワを摘み、屋内で乾燥もしくは貯えることを「コキダメ」という。養蚕期間は、母屋の戸障子はずして養蚕棚を組み、コキダメの際は戸を閉めきつて外気・日光を遮つて、屋内全面にヤマグワの葉を並べておく。コキダメが始まると、ヤマグワのため生活空間が占拠され、人間は広げられたヤマグワの間で寝起きした。永吉家では、コキダメの時は、ヌケ小屋で寝起きした。

白山麓焼畑地域の雑穀穂の乾燥・脱穀は屋内作業である。雑穀穂乾燥は、母屋内に「アマボシ」という穂乾燥施設を特設して、いろり火を熱源として乾燥した。乾燥後の脱穀は夕食後から就寝までの夜間に行った。ウスとキネで穂に衝撃を与え一粒一粒の穀粒を外す作業は、その衝撃が強い程効率が良い。強い衝撃でホコリが母屋中にたちこめ、衣服・家具は真白となる。母屋は閉め切りで、充満したホコリは、ランプの下部にある細かい空気穴の目をつまらせ、そのため空気がはいらなくなって燈が消えてしまう程である。また、ウスとキネの衝撃は、騒音と振動をともなつた作業でもある。永吉家では、子供は母屋で寝ようにも騒動・振動でままたならず、ヌケ小屋で寝た。脱穀は、乾燥余熱が残っている中に済ます慣行で、夜半を過ぎ2時、3時になることもあつた。大人は、ホコリを掃除した後寝ればよいわけであるが、永吉家では発生し散らばつたホコリは並大抵ではなかつたので手をつけず乾燥・脱穀期間中はヌケ小屋で寝起きした。雑穀穂の乾燥・脱穀作業の期間は、割と長く約20日間から1ヶ月程で、その間ヌケ小屋で寝泊まりした。

永吉家のヌケ小屋のように、強風時の避難ばかりなく、養蚕期間や雑穀穂の乾燥・脱穀期間にも利用したという事例は、他の出作りにもあつた。河内谷平岩^{へらいわ}の出作り・小田又七家^{こだ}が該当である。小田家の母屋は、間口4間1尺・奥行7間の2階建てで、2階全部を養蚕空間にあてていた。付属建物としてヌケ小屋1棟があつた。補足すれば、クラ・コゴヤはなかつた。ヌケ小屋の規模は石場間口2間・奥行4間。構造は4組の合掌をかけたネブキ小屋で、玄関に庇を出し出入口に簾を下げてあつた。小田家の母屋建築は2階建てで、養蚕に重きをおいた住居形式である。養蚕期間中は、母屋のネドコは使用せず、

家族全員はヌケ小屋で寝泊まりした。また、雑穀穂の乾燥・脱穀期間中、子供達はヌケ小屋で寝泊まりした。大人は、穂乾燥時、熱源としていろいろで大きい火を取扱う役割があり、火の管理(火の用心)のためいろいろの周囲で寝泊まりした。

大杉谷北俣出作り群の強風避難

大杉谷苛原の下流約500m付近で、右岸より支谷の北俣谷が合流している。かつて、北俣谷源流には

表2 北俣の出作りの住居状況

出作り	標高	斜面の向き	住居状況
7. 藪与八郎	1100 ^m	SW	耐風施設はなかった
8. 永井小新右衛門	1070	S	ヌケ小屋有、母屋もネブキ型式
9. 織田織松	940	S	納屋をヌケ小屋に兼用
10. 中村滝蔵	840	S	耐風施設はなかった

出作りの番号は、図1でその所在地を示す



写真5 苛原より北俣谷ワリ谷源流域(中央より左)を望む
手前は、出作り愛宕末太郎家

6戸の出作り群があり、出作りが存在した山地と出作り群の共同体を「北俣」とよんでいた。極高の出作りは標高1,100m、最低の出作りでも標高840mで、大局的には砂御前山の南斜面に立地していた。山地での風の影響は、伝承者によれば、標高が高くなればなる程、風力が強く、影響時間が長いという。標高740~760mの大杉谷苛原でも、強風避難用のヌケ小屋を建設したのだから、苛原より一段と高い北俣では風の影響を強く受けたと予想される。さらに、オオカゼは南風や南東風が卓越していたから、砂御前山南斜面の北俣では、オオカゼの影響をまともに受けたのではないかを推察する。北俣に存在した出作り6戸中4戸より聞き取り調査が可能であったこともあり、標高の高い場所の出作り住居と風の間わりについて、以下に概説する。

藪与八郎家 小屋場は標高1,100m、母屋は間口3間、奥行6間。付属建物は2間四方の板倉1棟、センジャ(大便所)が2棟ありいずれもネブキ小屋、その中1棟は肥料貯蔵を目的としていた。ヌケ小屋がなかった点を考えると、標高が1,000mを越えている割に、強風の当たりが弱かった小屋場と推察される。

永井小新右衛門家 標高1,070m。母屋は、間口5間、奥行8間の大型出作り住居であったが、大正13年火災で消失した。新しい出作り住居は間口3間、奥行6間、さらに前に玄関と後ろに仏間を、各9尺付け出したネブキ小屋にした。付属してセンジャが1棟、ヌケ小屋1棟があり、どちらもネブキ小屋であった。小屋場にはヌケ小屋が特設してあったこと、さらに、母屋・大便所・強風避難小屋の3棟いずれもがネブキ小屋であったこと等を勘案すると、永井家は風当たりの強い小屋場に立地していたと推察する。なお、ヌケ小屋は冬場漬物小屋を兼ねていたという。

織田織松家 標高940m。母屋は間口4間、奥行6間。クラ(土蔵)は9尺四方。コゴヤ(納屋)とカラス小屋は、共に石場間口2間、奥行3間でネブキ小屋であった。強風時には年数回コゴヤに避難し、コゴヤをヌケ小屋に兼用していたが「ヌケ小屋」とは呼ばなかった。カラス小屋は、長坂家というカツリすなわち水唐臼を施設したものである。母屋とクラの2棟は普通のタテアゲ、コゴヤ・カラス小屋の2棟は耐風耐雪構造のネブキであった事実から推察すると、この出作り地の風当りは相当強かったものと思う。

中村滝蔵家 標高840m。母屋は間口3間、奥行6間。クラは9尺四方。コゴヤは間口3間、奥行4間。3棟いずれもが普通のタテアゲであった。その外、ネブキ型式のセンジャ(大便所)があった。センジャをネブキ型式にするのは、出作り地で共通した慣行で、強風対策の意味は薄い。母屋・クラ・コゴヤの3棟がタテアゲであった事実から、この出作り地は風の影響が強くなかったと考えられる。

「ヌケ小屋場」という地名 北俣谷は、左俣のノノカワ谷と右俣のワリ谷に分かれ、さらにワリ谷はイモイワ谷とソラノ谷に分かれる。北俣の出作り群6戸の中5戸がノノカワ谷水系山地に、1戸がワリ谷水系山地にあった。風と出作り建築との関連について概説した4戸の出作りは、ノノカワ谷水系にあった。ノノカワ谷沿いの織田織松家と中村滝蔵家のほ

ぼ中間地点、生活道路沿いの標高約880m地点に、「ヌケ小屋場」という地名が存在したことを、織田織松氏より教示を受けた。「何々小屋場」という地名は、実際には数少ない。北俣谷には、ノノカワ谷に今話題にしている「ヌケ小屋場」と、イモイワ谷に「熊五郎小屋場」があった。一般的な出作り地名は、出作りを経営する人名・屋号をつけている。例えば、藪与八郎が経営する出作り山地の地名は「与八郎山」、永井小新右衛門家の出作り地は「小新右衛門山」となる。ところで、「与八郎山」「小新右衛門山」と言わないで、「与八郎小屋場」「小新右衛門小屋場」と言う時は、その意味する内容が違って来る。熊五郎小屋場と言う時は、かつて熊五郎家の出作り住居が建っていた跡地で、何世代か以前に出作りは廃絶され、住居の礎石・石垣等が遺構として残っている場所である。そして熊五郎山と言う時は、出作り住居も存在し、出作り経営が続けられている状態を指すのである。この原則を、「熊五郎小屋場」「ヌケ小屋場」にあてはめれば、二つの地名共に、歴史的地名で、過去に熊五郎の出作り住居があったこと、過去にヌケ小屋があったことを物語っている。補足すれば、「ヌケ小屋場」という地名は、地名存在場所に、幾世代も前に強風避難小屋があった証なのである。もし、「ヌケ小屋場」のヌケ小屋が、出作りの誰かが作った私的なものであれば、「ヌケ小屋場」という地名がつかず、出作りの人名・屋号がついたのでないかと思う。織田織松氏は、周辺出作りが共同でヌケ小屋を作り共同利用していたから、ヌケ小屋に私的な名称がつかなかったのではないかと指摘された。この地名由来説には、まったく同感である。苛原の長坂家や永吉家のように、私的なヌケ小屋を周辺出作りが使わせてもらう慣行があったことから類察すれば、共同でヌケ小屋を作り共同で利用する慣行もあった筈である。

大道谷太田谷・尾田富一家のヌケ穴

出作り尾田富一家は、大道谷太田谷右岸富ノ山・標高770mにあった。富ノ山の地形は急峻で、母屋は急斜面をL字型に整地して建て、規模は間口3間・奥行7間半の規模であった。尾田家のように、平坦地が狭く山を削って建てた住居を「山をかんでいる家」と形容し、それは「山を担いでいる家」という意味である。山を削って母屋を建てたから、山側はほぼ垂直状の小さい崖となる。この小さい崖の高さは、母屋の前部玄関脇で3.9m、後部脇で2.7mで、「山を担いでいる」程度が理解できよう。春・

秋のオオカゼの風向は、尾田家のある山地ではタツミ（南東）で、他の出作り地より風当たりが強かった。尾田家では、強風用の避難小屋に代わって、母屋の後部脇の崖に避難用の横穴を掘り、年4,5回利用した。この穴は、「ツチアナ（土穴）」とか「ヌケアナ」と言い、穴の形は炭焼釜の内部を真似て入口部は狭く、内部は方形で約2坪の広さ、天井はドーム状にしてあった。タツミカゼが吹くと、筵を持ちこんで敷き寝泊まりした。

ツカセー母屋の耐風施設ー

平常時でも風当たりの強い出作り地では、母屋に「ツカセ」という支え木を側面で補強し、風揺れを



写真6 ツカセを施設した出作り住居
(赤谷・山口市次郎家)

防いだ。最初にツカセを見た時、これは多量積雪の荷重が平均化しない時の支え木、すなわち耐雪機能をもった施設で、雪が融けてしまっても始末しないで放置してあるという視点で観察していた。ところが、ツカセは耐風の施設で、ヌケ小屋を特設した出作り地の母屋では、必ずツカセを付けていることの教示を受けた。ツカセは、クリ材の丸太材を使用する。ツカセは、丸太材をそのまま地面において支える場合と、へらべったい自然石を石場としてその上において支える場合があった。強風で母屋が揺れ動く、結果的にツカセが地面にもぐりこんだり、ツカセそのものが移動してしまう。そこで、ツカセは石場上においた方が効果良かった。秋の台風は、ラジオ受信機がなかった時代でも予想し易い。観察で、足の早いタツミ雲が流れだし、遠方のブナ林が白くなりだすと、ツカセを補強した。「ブナ林が白くなる」という森林の微妙な変化を、強風の前兆としている。台風を含めオオカゼは、標高の高い場所から強く吹き、次々と低い場所へ下りてくる。ブナ林に強風が吹きこみ、葉が強風にあおられて裏返し

になると、森林の緑が白っぽく変わってくるとしている。ツカセの補強策とは、「ヤ」という木製楔をツカセの元部に打ちこむ作業である。

強風時脱穀用木臼を吊り下げること

白峰村の出作り地域には、「タツミ風が吹けば臼を下げよ、うちがつぶれない」という俗信がある。ここでいう臼とは、ヒエ・アワ穂の脱穀用木臼のことである。形は、円筒型ではなく、中央部がくびれた型であり、その外径は80～90cmという大型で、重量も相当なものである。脱穀用木臼が、大型でどっしりしているので、「不動のもの」「大切なもの」との意識を生み、家長に例えて「ウチのオヤジ」「ウチのゴテ」との異名もあった。このように木臼を重鎮とする意識が、「木臼に神頼みし、家を守ってもらおう」という心理的依存心を起こし、俗信すなわちまじないとなったのかも知れない。別の視点では、重量のかさばる木臼を梁より吊り、住居の重心を下に移せば、倒壊予防策としては理にかなっており、合理的対策にも通じている。河内谷平岩・小田又七家では、強風時、母屋には急遽臼を吊り下げ、ツカセにはヤを打ち、ヌケ小屋で泊まったという。

強風時、民家内の梁に臼をぶら下げる習俗は、北海道のアイヌの人達の住居にもあった。この事例では、各家では2箇位の大して重くない臼を使っていたが、住居も小型なので理にかなった策であると、鷹部屋福平氏は指摘している(鷹部, 1943)。「タツミ風が吹けば、臼を下げよ」との伝承・行為は、臼に対しての信仰的意識から発生した俗信なのか、それとも体験的行為から発生した合理的対策なのか、判断しかねる。

ネブキ小屋—耐風耐雪構造の出作り住居—

焼畑農耕民が、山地に居ついた時の住居型式は、



写真7 ネブキ小屋の出作り住居(赤岩・山下石松家)

ヌケ小屋のようなネブキ型式でなかったかと推察される。白山ろく民俗資料館内にある尾田敏春家は、変型のネブキ小屋である。尾田家は、かつては、白峰村大道谷五十谷忠ノ山、標高785mにあった。なぜ、尾田家では変型ネブキ小屋にしたのであろうか。社会的要因と気候的要因が考えられる。尾田家の構造は、耐風施設のツカセと似た「ナバイ」という支え木を掛け、茅はナバイと屋根合掌組を続けて葺きあげネブキ小屋風になっている。生活者の体験から、ナバイは積雪に対する仕組みではないという。冬季、屋根雪を降ろすと、雪はナバイの上部に積み降ろすことになり、さらに雪を掘り下げてナバイに荷重する雪を除去したという。そこで尾田初氏は、ナバイは風に対しての仕組み・施設と位置づけされた。忠ノ山をめぐる風系は複雑で、しかも風当たりが予想以上に強かった。風の通過地で、絶えず風が強く吹き渡る場所を「カザミチ」と言う。忠ノ山は、ヒエ田・常畑面積が他の出作り地より広く、恵まれた小屋場であったが、カザミチに当り、その風はまともな順風ではなかったらしい。時には五十谷対岸のゴザ山からのカエシカゼ(返し風)が吹き、時には複雑な山地の影響で風向の一定しないマエカゼ(舞風)が吹く出作り地であった。要約すれば、尾田家の変型ネブキ小屋は、小屋が建っていた忠ノ山がカザミチであり、独特のカエシカゼ・マエカゼが吹き渡るので、耐風機能を最優先させた住居型式と考えたい(橋, 1974)。

尾田家と同じような外観であるが、合掌をそのまま地上で組み、茅を吹いたネブキ小屋も、冬季の除雪には合掌の基部までも、積雪荷重を軽くしてやらねばならない。だからネブキ小屋は、機能的には耐雪としての構造をもちあわすが、より耐風に重点をおいた住居構造かも知れない。



写真8 大道谷五十谷の出作り・尾田敏春家(変型のネブキ小屋)

おわりに

事例数が多くはなかったが、山間僻地で孤立して生活する出作りが、強風襲来時の自衛策としてヌケ小屋を建て多目的に利用した実態を、可能な限り紹介した。その概略は次のようである。

1. ヌケ小屋とは、強風時の避難小屋で、集落内ではなく、出作り地先の山地にあった特色的な建物である。
2. ヌケ小屋の構造はネブキで、春・秋のオオカゼに年数回避難した。避難時は夕暮れより翌朝までの夜間が主であった。
3. ヌケ小屋は、所有者だけでなく周囲の出作りも利用した。また、ヌケ小屋を共同製作し、共同利用する慣行もあったらしい。
4. ヌケ小屋の代わりに、横穴式のヌケ穴もあった。
5. ヌケ小屋は強風時だけでなく、養蚕や雑穀脱穀の期間にも寝泊まりし、その慣行を恒常化した出作りもあった。
6. ヌケ小屋は、水唐臼を施設してアワ・米の精白に、出荷前の炭俵収納に、冬場の漬物桶収納等、多目的に利用した。

終わりに、ヌケ小屋を必要とした社会的要因に触れておきたい。

広大な山地のどこでもが焼畑に適するわけではなく、山地のどこでもが出作り住居に適するわけではない。白山麓は豪雪山地であるため、標高700m以上高地では、多量積雪が早く融ける南向き斜面が焼畑適地、さらには出作り適地になりやすい。白山麓では春と秋、「白山オロシ」「タツミカゼ」という呼称の強風が吹く。この強風は、呼称が暗示するように風向は大局的に南風である。雪が早く融け日照時間の長い南斜面は、農耕・居住条件は良かったが、反面強風が吹き渡る斜面でもあった。初期の出作り住居は、耐風構造に重点をおいたネブキ型式で、風当たり容積を少なくするため小型の建物であったと思う。

ところで商品経済が普及してくると、白山麓の僻地出作り地にもその流れが浸透してくる。出作りでは、焼畑でヤマグワを栽植する技術を安定させ、養蚕を行い繭・生糸の売却を計るようになる。養蚕による現金収入増をめざす時は、方策として養蚕空間を拡大することがなされた。養蚕空間の拡大とは、出作り住居を平面的、立体的に広くすることである。平面的拡大とは、間口・奥行の規模を一段と大

きくして大型住居を作ることであり、立体的拡大とは、ネブキ型式を止めタテアゲ型式に改め、さらに1階建てを2階建てにすることである。養蚕のため大型化・2階建てとなった出作り住居は、耐風性ではネブキ型式の住居より弱かった。住居の大型化で、養蚕空間が増え繭収量が増えても、出作り民の強風への心理的不安はぬぐいきれない。そこで養蚕向き的大型出作り住居は、強風時の緊急性に備えて、伝統的な耐風構造のネブキ小屋を評価して併設し、避難用に利用したのである。そして養蚕は衰退しても、大型住居にとってヌケ小屋の必要性は変わらないから、長く残ってきたものと思う。

ヌケ小屋が存在した出作りや、ヌケ小屋慣行を伝える出作り等の住居規模は、概して大型の傾向にある。具体的には、長坂吉之助家は4間・8間で2階建て、小田又七家は4間1尺・7間の2階建て、尾田富一家は3間・7間半、永吉清正家は3間・6間である。ヌケ小屋は、養蚕空間拡大のための住居拡大策と、非常に関係が深かったのである。

謝辞 この報告の調査にあたり、多くの伝承者より私的時間を割いていただき、貴重な情報の御教示を受けた。お世話になった方々は次の通りである（敬称略）。末尾ながら、厚く御礼申しあげる次第である。これらの方の中には、既に故人となられた方もおられ、御冥福を祈るものである。

織田織吉（住所・生年、鶴来町・大正7年）、加藤まつえ（鶴来町・大正9年）、小田発松（白峰村・明治27年）、永井竹男（勝山市・昭和2年）、長坂吉之助（白峰村・明治28年）、中村竹男（白峰村・大正13年）、永吉清正（白峰村・明治42年）、尾田敏春（白峰村・昭和16年）、尾田初（白峰村・大正13年）、尾田富一（白峰村・明治44年）。

文 献

- 佐々木高明（1981）白山麓の出作り－その盛衰と実態－。石川県尾口村史、第三巻・通史編、尾口村役場、626－673。
- 橘 礼吉（1973）白峰村・住生活。白山麓－民俗資料緊急調査報告書－、石川県立郷土資料館、11－26。
- 橘 礼吉（1974）白山麓出作り住居の原型ネブキ小屋について（一）。加能民俗研究、加能民俗の会、17－33。
- 橘 礼吉（1979）住生活。石川県尾口村史、第二巻・資料編二、尾口村役場、600－679。
- 橘 礼吉（1991）白峰村の焼畑・出作り。白峰村史、第三巻、白峰村役場、942－1025。